

令和4年度校内研究推進計画

福島県立大笹生支援学校

1 研究主題

学習や生活の場面で活用できる！ 生きて働く力を育む授業づくり
～「教科等横断的」な視点を踏まえて～

2 研究主題設定の理由

(1) 主題の捉え

【生きて働く力とは】

児童生徒が学習したこと、経験したことが学びとして定着し、他の学習場面で活用したり、自分の課題等を見つけてさらに学ぼうとしたりする力のこと。また、「深い学び」の姿と定義されているように、知識・技能が相互に関連付けられ、構造化されたり身体化されたりして高度化し、適正な態度や汎用的な能力、概念的な知識となって、自由自在に使いこなせるように“駆動”する状態に向かっていく力のこと（『深い学び』田村学）。

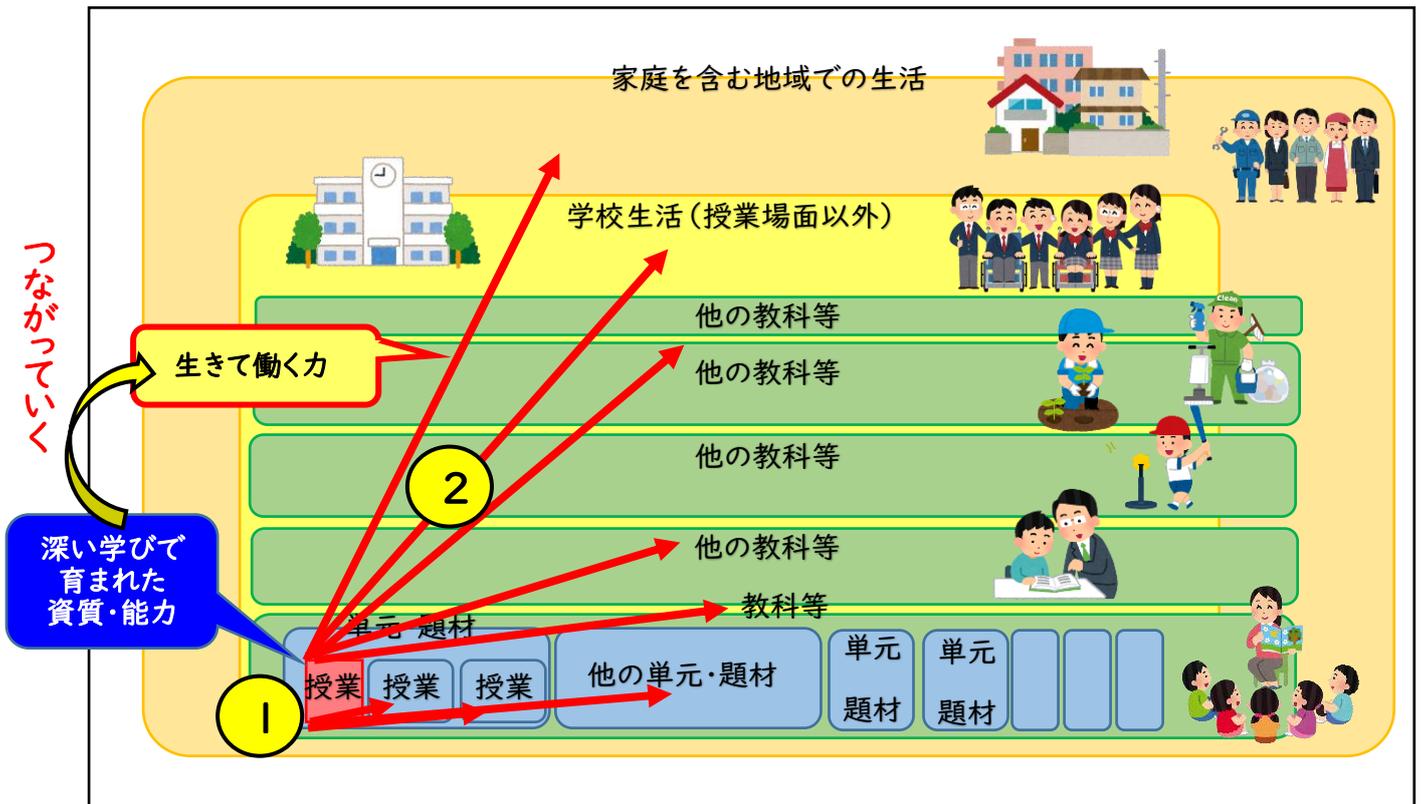


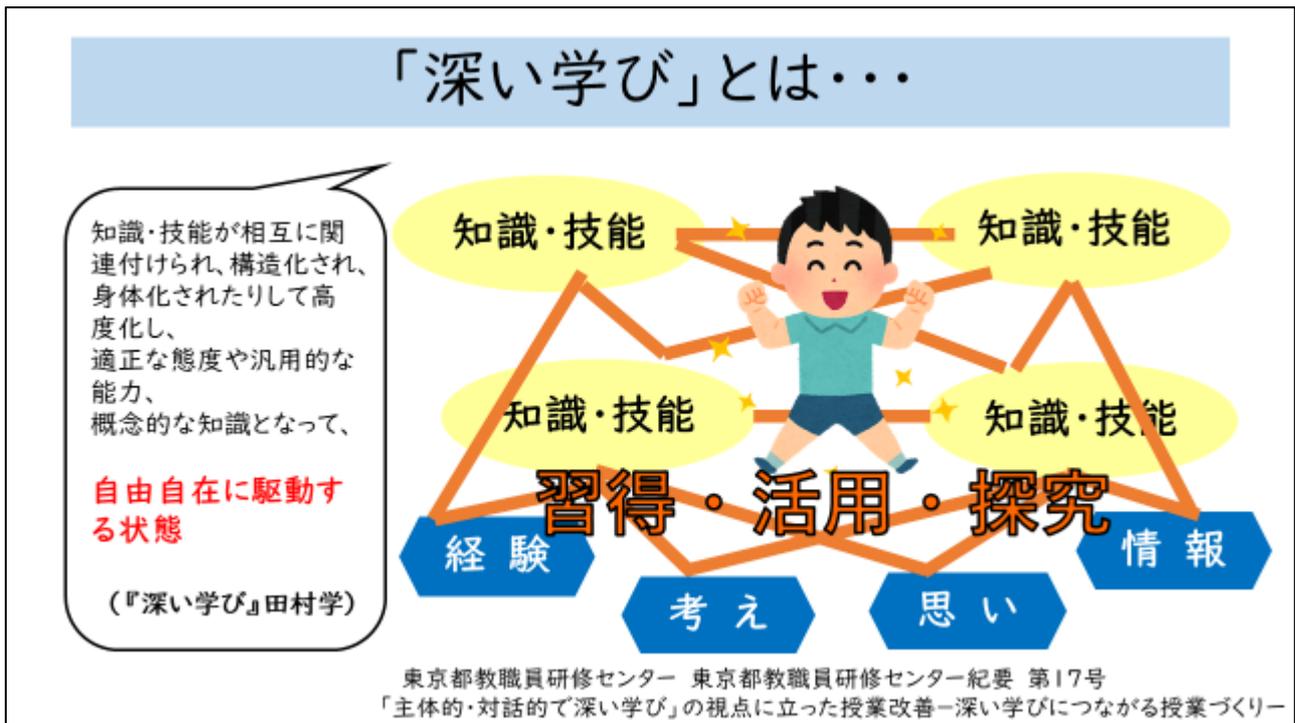
図 学習や生活の場面で活用できる力・生きて働く力

※参考資料（秋田県立横田支援学校 H30年度研究紀要第39集）

① と②を授業づくりでどうで押さえていくか、
双方を意識した単元構想力・授業実践力が必要である。

達成のポイント!!

【研修で実践してきた「深い学び」のポイント】



(2) 過年度の校内研究から

令和2年度・3年度（2年計画）は、研究主題を「深い学びの実現を目指す授業づくり～「深い学び」による資質・能力の育成に向けて～」とし、「深い学び」と児童生徒に育む資質・能力とのつながりを整理し、「深い学び」につなげるための授業づくりにおける視点を研究してきた。

【令和2年度】～「深い学び」の理解と実践～

令和2年度（1年次）の取り組みでは、児童生徒が既習の知識や学んだ知識及び技能を相互に関連付けてより深く理解する姿や活用しようとする姿、新しい知識に気付いたり概念を形成したりする姿といった、想定される「深い学び」の実現を目指して、主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善を行ってきた。また、単元を通して育成する資質・能力を三つの観点で整理し、教科で学ぶ本質について考察してきた。深い学びの姿を具体的な児童生徒の行動する姿で捉え、徐々に深い学びについての視点をもつことができるようになったが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるとはどのような姿を引き出すことなのか、より理解を進める必要があることや、各教科間における指導内容の関連付けを図ることなどが課題として挙げられた。

次年度には、育成したい資質・能力に向けて、各教科の見方・考え方を働かせて「どのように学ぶか」といった学びの過程を大切にしながら、単元・題材全体の構成を組み立てていくことを中心とし、授業づくりを継続して研究をすすめていくこととした。

【令和3年度】～「深い学び」へ導くための単元構想～

令和3年度（2年次）は、上記で記載した1年次の取り組みから見えてきた本校における「深い学び」の視点を生かし、その「深い学び」の視点と育成を目指す資質・能力についてのつながりを教員間で共有して授業づくりに取り組んだ。①教員一人一人の授業づくりにおいて「深い学び」の視点の明確化と共有化、②資質・能力の育成に向けて「深い学び」の実現のために「見方・考え方を働かせること」「学びの

過程において、知識の習得・活用・探究の場面設定など、学びを深めていくための手立て」「各教科等の関連付けを図ること」について、授業での具体化を目指して授業実践に取り組んだ。ある単元や題材を通して育む資質・能力について、各教科の見方・考え方を働かせながら、知識の習得、活用・発揮の場をどのように設定するか、つまり学びをどのように深めていくかという、単元で学んでいく過程を重要視して取り組むなかで、「各教科の見方・考え方を働かせる」ことの理解に難しさを感じながらも、教科で学ぶ本質を丁寧に考察し、教員一人一人が自分の授業作りに真摯に向き合い、実践をまとめることができたことは大きな成果である。

「各教科等の関連付けを図ること」については、年間指導計画一覧等を活用して単元（題材）や教科間のつながりを意識しながら授業づくりを進めた。しかし、授業づくりにおいて各教科等の関連を図るといった具体的なイメージがもちづらく、単に内容が関係する授業であったり、系統的な学びの段階をおさえる程度の捉えであったりと、年間指導計画一覧表に矢印を加えるのみにとどまった例がほとんどであった。また、一つの単元において深い学びを追求する授業実践になっていたことで、単元間や教科間の関連付けの実践まで進めていくことができた事例は少なかった。「教科等横断的な視点」が深い学びの実現と大きく関係があるという意識はあるものの、教員間ではまだ不十分な理解であり、今後の課題として残った。

（3）研究主題に迫るために・研究仮説

前研究では、「単元のまとまり」において、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す取り組みから、単元の目標となる資質・能力の育成を図ってきた。この資質・能力がバランスよく実現して、はじめて他の単元、他の教科等でも活用・発揮できる力となる。その意味でも「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりについては継続的に取り組んでいくことが不可欠である。

【教科等横断的な視点に立った資質・能力とは】

前述の「生きて働く力」を育むことを目指して教育活動の充実を図るにあたり、学校教育全体及び各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを、資質・能力の三つの柱を踏まえながら明確にすることが求められている。育成を目指す資質・能力の例について、学習指導要領解説総則編において、平成28年の中央教育審議会答申では以下のように大別している、と記されている。

- ①例えば国語力、数学力などのように、伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる力としてのあり方について論じているもの。
- ②例えば言語能力や情報活用能力などのように、教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される力について論じているもの。
- ③例えば安全で安心な社会づくりのために必要な力や、自然環境の有限性の中で持続可能な社会をつくるための力などのように、今後の社会の在り方を踏まえて、子供たちが現代的な諸課題に対応できるようにするために必要な力の在り方について論じているもの。

（数字、下線 研修部）

さらに1点目の下線部分に関して、「教科等ごとの枠の中だけではなく、教育課程全体を通じて目指す学校の教育目標の実現に向けた各教科等の位置付けを踏まえ、教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図りながら、幅広い学習や生活の場面で活用でき

る力を育むことを目指したりしていくことも重要となる。」と記されている。

学習したことや経験したことを、他の学習場面で活用することで、児童生徒の力はより確かなものとなる。児童生徒がある教科等の学びを他の教科等の学びで活用したり関連付けたりすることで、学びがさらに深まったり、力を実感できたりするようになるのではないだろうか。社会の中で活用できる力、すなわち「生きて働く力」を育むために、教科等横断的な視点で授業づくりを行い、児童生徒が学んだ力を様々な場面で活用できるようにしていく取り組みを、今年度から新たに3年計画での本校の研究テーマとする。

また、本校では令和4年度の重点事項において「教科等横断的な視点に立った資質・能力」について言及している。したがって、学校が目指していく児童生徒の資質・能力を育てていくことができるよう、過年度の成果を踏まえながら、さらに課題として挙げられた内容を中心として研究していくこととする。

研究を推進していくためのポイントとして

- (1) 各教科等の特質に応じた資質・能力を正しく確かなものに育む。
- (2) 年間指導計画一覧や学びの履歴シート等を活用し、単元における教科等の関連を踏まえて授業を行うことで、教科等横断的な視点に立った資質・能力、枠を越えた力の育成を目指す。

この2点を中心におきながら取り組んでいきたい。

1年次では、まず①で挙げられている「教科等横断的な視点」について授業づくりを通して教員間で理解を深める。2年次・3年次においては、1年次の取り組みを踏まえ、さらに②学習の基盤となる資質・能力「言語能力」「問題発見・解決能力」「情報活用能力」等の育成に関する取り組み、③現代的な諸課題に対応していくための資質・能力の育成に関する取り組みを、授業実践を通して考えていくこととする。

3 研究目標

- (1) 「教科等横断的な視点に立った資質・能力」を育成するための指導方法について3年計画で研究を進め、年次ごとに成果や課題を明らかにする。
- (2) 年間指導計画一覧や学びの履歴シート等を活用し、単元・題材を通して身に付けた資質・能力を他の学習場面で活用・発揮することや、教科間の関連付けを図りながら児童生徒の学びを深め、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指す授業づくりを実践することができる。
- (3) 授業づくりを含めた校内研究の推進を通して、教職員の指導力と専門性の向上を図る。

4 研究方法及び内容

- (1) 主な研究組織は小学部・中学部・高等部とし、各部でさらに小グループを組織し、研究テーマに基づいた授業実践を通して校内研究を進める。
- (2) 学習指導要領を読み合わせ、「教科等横断的な指導内容」の視点をもった授業づくりにおいて、育成を目指す資質・能力（何ができるようになるか）に基づいて単元・題材での学習内容（何を学ぶか）や指導方法（どのように学ぶか）、主体的・対話的で深い学びを実現するための手立てについて、単元・題材計画案を作成、検討する。また教科間の関連付けについても、習得した知識を他の教科や単元のどの場面で活用・発揮させるのか検討し、それが児童生徒の学びを実際に確かなものになっているか、生きて働く力につながっているか、授業実践を通して考察する。
- (3) 各研究グループにおいて授業研究（年間指導計画一覧の活用、単元・題材計画の作成、授業のビデオ

才視聴による協議等)を実施し、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成について理解を深めるとともに、学び得た知識を各自の授業に生かす。

- (4) グループ内外での授業参観や授業研究、公開研究会等で実践を発表する場を設け、教職員が互いに学び合う機会を設定する。
- (5) 5月と2月の全体研究会において、各研究グループのまとめや成果と課題を共有することで、校内研究の取り組みについて教職員の共通理解を図り、次年度の研究へつなげる。
- (6) 年度ごとに実践事例集を作成することで、教科等横断的な視点での授業づくりについて、それぞれの実践を本校の取り組みのデータとして蓄積し、広く活用できるようにする。
- (7) (研究テーマに関わる教育講演会) 令和4年度は、6月2日(木)と12月9日(金)(※公開研究会)に国立特別支援教育総合研究所 研究企画部 主任研究員 北川貴章氏を講師に迎え、「生きて働く力を育む授業づくり～『教科等横断的』な視点とは(仮)」の演題で講話をいただき、併せて本校の研究について助言をいただく機会とする。

5 年次計画 (案)

